大学の帰属意識に影響を与える諸要因とジャーゴンの役割
― 社会的アイデンティティ理論の有効性 ―

浅井 亜紀子

Influential Factors of College Identification and the Application of Social Identity Theory

ASAI Akiko

桜美林大学
桜美林論考『言語文化研究』第2号　2011年3月

The Journal of J. F. Oberlin University
Studies in Language and Culture, The Second Issue, March 2011

キーワード：社会的アイデンティティ、帰属意識、ジャーゴン、大学生

SUMMARY

"Social identity" is defined as one's knowledge of identification with a social group, and its theory has been developed based on experimental research in group-to-group relationships. This qualitative study examines how social identity theory is applicable to college students' feelings of identification with their college. In this study, factors influencing undergraduate students' feelings of identification with their college are investigated, including the roles of college jargon in their identification with their college.

Two investigations were conducted. In the first investigation, a total of 24 first grade students were asked the following: (1) to report their transitional experiences from their high school to college in one year; (2) to complete a three day journal twice a year; (3) to join group discussions on two occasions; (4) to write a report about their one year transitional experiences upon entering college. In another investigation, a total of 159 undergraduates were asked to write a report of their feelings of identification with their college, and they were examined on their knowledge of jargons used on campus.

The results found three factors influencing their sense of identification with their college: (1) human relationships in college, (2) knowledge and skills of goal-achievement in college, and (3) comparison of their college with other colleges. Jargon also plays an important role in promoting relationships with other members, utilizing university knowledge effectively, and giving authentic feelings of memberships of their college in informal ways. Theoretical implications of social identity are also discussed.

1. 研究の背景と研究課題

本研究では、ある集団に入った成員が、いつどのように集団としての帰属意識を感じていくのか、その帰属意識は集団の特有の言葉ジャーゴンの使用とどう関係していくのかを、大学生の事例をもとに検討する。本研究の目的は社会的アイデンティティ理論の有効性を検討し、今後の研究への示唆を提示することである。

本研究で大学生を扱う理由は2つある。一つには、大学生は中学、高校生に比べ自分自身を客観的に捉えることができる発達段階にあること、もう一つは、大学への帰属は、義務教育の小中学校はもちろん高校と比べて任意であり、個人が主体的に所属を選ぶことができるため帰属意識がみえやすいからである。

社会的アイデンティティとは、ある個人の感情的および価値的な意味付けを伴う自分がある社会集団に所属しているという認識である、と定義される（Tajfel,1978; Tajfel &Turner, 1986）。人間はある集団に所属しているとき、その集団の社会的カテゴリーを割り当てられる。「自分は○○大学の学生である」、「私は○○会社の社員である」というのは、個人が大学や会社に所属していることを表しており、社会的カテゴリーとして、自分に割り当てることができる。しかし、たとえ個人がその大学や会社の一員であっても、心理的な所属を感じているかどうかは別である。本研究では、集団への帰属意識は、どのような要因の影響を受けているのかを検討する。

これまで社会的アイデンティティ理論は、人間の集団行動を検討するのに大きな貢献をしてきた。しかし、理論の検証を行うために、主として実験による研究を行ってきた（Tajfel, 1981; 垂澤・広瀬, 2006）。伝統的な社会心理学においては、人間の社会的行動を、科学的に研究するために、人間を自然科学の対象物と同じとみなしたからである。物理学の対象と同じく、人間は、刺激・反応の法則に支配されたモノであり、様々な刺激の条件を統制した実験室実験により、要因と結果を明らかにしようとした。しかし、実験に基づく研究方法のみが科学的だとする科学主義に対し、行き過ぎが批判されるようになった。実験で得られたデータは、実際の人間の行動をどのくらい説明できるのか、人間は実験で得られたとおりに行動するのか、という疑問が呈された。そのような批判から、これまで主観的であるとされた人間の言語を見直し、個人の主観や経験に重点を置き、どのような文脈の中で人間が言語によって意味づけするかを重視する動きがでてきた。

社会的アイデンティティ理論についての先行研究をみると、言語の位置は必ずしも高くはない（ホッグ・アブラムス, 1995）。心理学では、言語より非言語に多くの研究が集中している（Argyle, 1973 & 1975; Mehrabian, 1971; 大坊, 1998）。集団の研究においても、より効果的で生産的な集団にするためにコミュニケーション構造に注目し、集団凝集性、集団サイズ、集団の目的に関連づけて、誰が、誰に、いかに話をするかの検討が中心になっている。

しかし、言語は集団の中で重要な機能を果たすことが知られている。たとえば、社会言語学の分野では、階級や性、人種などの社会的特性と言語の関係に注目し、言語を分類しその特徴を検討したり（山田・田中, 1999; 西村, 2008）、集団での言語の機能を検討したり

してきた。たとえば米川（1996）は、現代の若者言葉を集めて研究し、若者の言葉の機能として7つの機能、すなわち娯楽機能、会話促進機能、連帯機能、イメージ伝達機能、隠蔽機能、緩衝機能、浄化機能をあげている。中でも、連帯機能は、集団での連帯感や社会的アイデンティティと関係すると考えられる。

アイデンティティという言葉は用いていないが、あるサブカルチャーに所属する成員の言語についての研究が幾つかある。Miller（2004）は、言語心理学の立場から、日本のコギャル言語や行動を分析し、彼女たちが独特のスラングを使って主流のジェンダー化された言語や文化に対抗している実態をフィールドワークによって記述した。Deters（2009）は、外国人教師が成功するために、その国の職業的言語の習得が重要であることを見出している。これらマイノリティのサブカルチャーの成員にとって、サブカルチャー内の言語を習得し活用することは、主流文化に対抗する意味をもつこと、また、マイノリティの人々が主流文化の中で成功するためには主流文化の言語を習得することが不可欠であることを示している。

これらの研究は、言語がサブカルチャーやある集団の成員によって創造され、積極的に活用されるという側面を示している。そこで本研究では、ある集団の中に入ったメンバーが、いつどのようにその集団の言葉を身につけるのか、それは彼らの集団への帰属意識とどう関係しているのかにも焦点をあてて探る。

本研究の目的は、1. 大学生の帰属意識はどのような要因に影響を受けているのか、2. 大学入学してからの大学生の帰属意識はどう変化するのか、3. 大学でのジャーゴンは大学生の帰属意識にどう影響するのか、その上で、4. 社会的アイデンティティ理論の有効性と限界と今後の方向性を検討する。

2. 研究方法

本研究は大きく分けて2つの調査から構成される。

調査1は、首都圏の4年制女子大学の言語学系の学部1年生24名である。データは以下の3種類を収集した。①3日間の自己観察記録とその報告（入学後2ヵ月後と6ヵ月後の2回）、②グループディスカッション（①の直後2回実施）、③1月時点での自己報告である（入学後8ヵ月後）[1]。3日間の自己観察記録は、学生が大学のある日とない日を混ぜ合わせた3日間をとり、起床から就寝までの出来事、感情、考えを記述し（箕浦、1999）、最もよく経験した感情について報告した。自己観察記録は入学後2ヶ月後と6カ月に行った。グループでの話し合いは、4、5名からなる小グループに分かれて20分間、自己観察記録と報告の提出後に2回実施した。小グループではリーダーを決め、必ず全員が参加するよう指示した。話し合いは録音しすべて書き起こした。入学後8か月の1月に自分の大学にどう慣れてきたか、連帯感やアイデンティティについて感じることを報告した。

調査2では、2009年と2010年の5月に、首都圏の4年制共学の大学で男女159名（男子72名、女子87名、1年生19名、2年生80名、3年生37名、4年生23名）に対して2種類のデータを

集めた。1つめは、自分の大学の帰属意識についての自己分析である。「入学してから今までの大学への帰属意識の強さの変化、現在の帰属意識、どのようなときに帰属意識を感じるか」についての記述による報告である。もう一つは、大学のジャーゴンについて大学生が知っているものをあげてもらい、その中から選択した20のジャーゴンの意味を書いてもらう「ジャーゴン知識度のアンケート」である。ジャーゴンの意味の正解数を点数とした。

これらの自己報告記録およびグループの話し合いで得られたデータは記述データとして分析を行った。所属意識について、どのように表現されているのか、そう感じるのはなぜか、ジャーゴンはどのように使われているのか、ジャーゴンについてどのように感じているのかを中心に書き出し、帰属意識をどのように感じているかを中心に、パターンを分析し、カテゴリーを生成した。

3. 結果

大学生の帰属意識に影響を与える要因として、集団での人間関係、集団の目標達成、そして、他集団との比較が関係していることがわかった。ジャーゴンの獲得がこれらの次元にどのように関係しているかを、大学生の語りのデータから読み取っていく。

3.1. 大学生の人間関係と帰属意識

3.1.1. 新大学生の人間関係と帰属意識

入学直後は、大学という新しい集団への帰属意識の薄さが報告されているが、その理由には、大学での友人関係が広くて浅く、高校への帰属意識が強く残っていることがあげられていた。入学後1カ月たった1年生男子は、「高校が一緒だった友達とは連絡を取り合ったり遊んだりしている。大学で知り合った友達はアドレスを知っているだけで授業中だけの付き合いという感じ。昼食も一人で食べることが多く、けっこう悲しい」と語った。また、大学3年生が、入学当時のことを思い出し、「入学したころはまだ、大学生というよりは高校生の頃の自分を引きずっていたと思う。高校という生活に慣れていたし、大学に入学当初は知り合いもいないので、帰属意識は高校生だった」と述べている。

次の大学1年生のグループでの話し合いの例1には、高校と大学の友人関係の違いについて、より詳しく表現されている。

Y「高校では、その点、[時間割が] 決まっていたし毎日、同じ時間に出て同じ時間に帰るとかだから。こっちは、なんか3限からとか1限からとか、みんなバラバラだから。」
U「[高校では] いつも友達とかもさ、いつも一緒にいる友達とかいたけど。」
I「今は、なんていうのかな、個人個人で行動するようになるよね。」
U「高校のときは、狭く深くっていう感じだったけど、大学では、広く浅くって感じだよね。」
I「幅広く付き合っているって感じだよね。移動の時間とかさ、人が変わるし、あんま

り落ち着いてられない。落ち着けるときがない。」

（1年女子のグループでの話し合い例1）

この会話には、高校時代の友人関係は、基本的には朝から同じ教室で同じ友達と「決まった」時間割で授業を受けるため、「いつも一緒にいる友達」と「狭く深く」付き合う関係であったこと語られている。しかし、大学では、個々に授業を決めるため教室の移動に伴う一緒にいる友達がいないことがあり、「みんなバラバラ」で「広く浅い」つきあいであると語られている。このように大学での友人関係や希薄さが、大学への帰属意識の薄さの原因となっていることがわかる。

3.1.2. 大学生の人間関係の変化と帰属意識

入学したときには、高校生の友人関係が中心で、大学への帰属意識は薄かったものの、大学生活の年数を重ねるにつれ、大学での人間関係が深まり、帰属意識は変化していた。ある大学2年生女子は、「入学したてのときは、すべてのことが新鮮で、すべてのことに希望が満ち溢れていた。しかし、そこに安定、安心はなかった。1年たった今は、授業を合わせる友達がいる、お昼を一緒に食べる友達がいる、サークルの先輩もいる。その友達や先輩に会ったときや、一緒にわいわいと盛り上がっているときに、帰属意識を感じる」。また3年生の女子は「入学当時は帰属意識は全くなく、個人でうごき、自身が大学の一員であるという意識がなかった。2年くらいから友達もできているので会話の中で大学のことをしゃべるようになり、大学の一員という感覚がでてくる」と語っている。

これらから、大学での友人、先輩との人間関係の「安定感」や「わいわいと盛り上がる」仲間関係に、大学への帰属意識の強さを感じていることがわかる。

3.2. 大学生での目標達成と帰属意識

3.2.1. 新大学生の大学での目標達成と帰属意識

大学に入る目的は様々であるが、入学をしたら授業を履修し単位を修得し、卒業をしなければならない。そのためには、大学の履修制度やルールについての知識はもちろん、大学の施設など学習環境についての知識が必要であり、同時に授業の内容を理解する能力やスキルも求められる。

大学のカリキュラムや履修システムを理解することはたやすいことではない。ある大学3年生が入学時を振り返って次のように語った。「入学したてのころは、『高校のほうが楽しい』と思っていたこともあり、自分から積極的に行動しなかった。そのため今では知っている大学の制度や履修システムもよく理解できず、なんとなく疎外感を感じた」（大学3年女子）。このように、大学の履修システムについての不理解は、大学からの「疎外感」を感じさせることになり、結果として帰属意識の薄さを招いているといえる[2]。

新大学生は、大学での授業への参加のしかたについても不安を感じている。次の大学1

年生のグループでの話し合いにその不安が語られている。

T「高校の授業は、ただ黙って授業を聞いているっていう形がほとんどだったのに対して、大学では自分から参加しなくてはいけないと言うところで、最初は大きなストレスみたいなものを感じた。」
S「確かに。うん、うん、うん。」
T「それに、なんか大学では、勉強したい人が自分からするものだから、すごい自主性が求められるところだと思った。」
N「あと授業もやっぱり高校とは違って、なんか自分から参加してかなきゃ、なんか置いてかれるみたいな感じでちょっと困っている…かなぁ。」

(1年女子のグループでの話し合い例2)

新大学生は、大学での授業では「より自主性が求められる」ところに、高校の授業との違いを感じている。授業の単位は自分で修得していくものであり、積極性や自主性をもって参加していかなければ、大学という集団での目標達成をすることができない。学生Nの「置いてかれるみたいな感じ」という言葉には、授業への不安を示しているが、これは、高校とは違う新しい大学という集団に求められる積極性、責任感といった「精神的自立」が十分できるかの不安である。

このように授業やカリキュラム、学習環境、履修システムなど、卒業という目的を果たすのに必要な「大学の知識」や「精神的自立」が十分でないということが、集団からの「疎外感」や「置いて行かれるみたいな感じ」をもたらし、それが帰属意識の薄さとなっている。

3.2.2. 大学生の目標達成についての変化と帰属意識

多くの大学生は、入学時のころは、大学への帰属意識は低いが、学年が上がり、大学の知識が深まるにつれて帰属意識が強まると認識している。

大学生としての目標達成に関し、最も大事なのは、自分が学びたいことを明確にすることと、学べる環境を作ることである。ある2年生の女子学生は、「入学当初は何もかも初めてのことで不安で大学に通うだけで疲れていた。今は大学で何ができるか、何をしたいのかが少しずつ見えてきた。友達と専攻は何にするか、など授業の話をしているとき、他大学生と話しているとき、帰属意識を感じる」。このように、自分が学びたい目標が定め、それを大学で学ぶことができるという「目標の明確化と遂行」が大学への帰属意識に関係している。

従って、時間割などの履修システムへの慣れも、大学への帰属意識を高めるものになっている。2年生の男子学生が次のように報告している。「自分が時間割を組むときなどが1年生のときと比べて上手に組み立てられるようになり、上手に時間を過ごせるようになるとT大学に慣れたと帰属意識が強くなった」(2年男子学生)。またある3年生の男子は、「入

学したころはまだ、大学生というよりは高校生のころの自分を引きずっていたと思う。・・・しかし、春学期がおわる前にはだいぶ生活に慣れていたと思う。たとえば、建物、T大学は建物の名前が独特だし、あちこちに点在しているので始めのころは迷っていたけどそれが自然とわかるようになっている現在は所属意識が高まったということだと思う」と、大学の施設についての知識が十分になるにつれ、帰属意識の強まりを感じると報告している。

このように集団で過ごす時間の長さが、大学の履修や授業での目的意識を深め、そのことが集団への帰属意識の強さに影響を与えている。

3.3. 自集団の他集団との比較による位置づけ

3.3.1. 新大学生の自集団と他集団との比較による位置づけ

入学して間もない時期の大学生は、自分が所属することになった集団について他の集団と比較しながら、積極的に情報収集をしていた。入学時は、自分が所属することになった大学についての知識が少ない。従って、自分の大学はどのような集団なのかを、他の集団と比較して、優位な所や劣位なのところはどこか、特徴は何かを知ることによって、自分の所属する集団を知ろうとしていた。

次のグループでの話し合いの例は、自分の大学が他大学と比較してどう見られているかが話し合われている。全部で5つのグループが話し合いを行ったが、そのうち3つのグループでの話し合いで他大学との比較がなされていた。グループの話し合い例3には、自分の大学についての印象を話し合う流れから、自分の大学が社会の中でどう位置づけられているかを話していた。

I「女子大生っぽくないよね。この学校。昔の女子大っぽい。」
H「なんか華やかさ、若々しさがない。」
D「そうそうそう。」
H「いいふうにいえば落ち着いているんだけど。派手さがないわ。」
E「うちの学校あったよ。生徒が学生が、来てよかったと思う［大学のリストに］。1位はね、I大学。I大学でもみんなそうなんだって。I大学はみんな来てよかったって。」
全「うそー。」
I「2位は？」
E「2位かどっかにG大学とか入ってて、それで、さあ何位だったっけ8位かなんか。」
A「7位以下だよ。」
E「入ってたよ。なんか、福祉とか整っているとかって。」

（1年女子のグループでの話し合い例3）

上記の例においては、自分の所属する大学についてHのように「華やかさ、若々しさがない」と否定的な評価をする中、大学ランキングで福祉面では10位以内にランクされてい

ることで、社会的にある程度の評価のある集団であるという所に落ち着いている。

また、次のグループの話し合い例4では、他の大学から、自分たちの大学がどのように評価されているか話題にされていた。

K「私は深い友達がいないと不安って思ったんだけど、みんなと広く浅くていいのかなとか思って。それが大学なのかなって思った。」
W「あんまり求めちゃいけないなとか。」
K「でも深い友達とかもほしいかなとか思っちゃう。」
W「なんかね、そんなに焦らなくてもいいかなと思う。」
K「他の大学の話とか聞くと、結構深くつきあっているっていうか、うちの大学だと違うのかなって。」
T「うちの大学とP女子大と対立しているよね、お互い。」
W「E大学の人がね、うちの大学って超遊んでいるとか、［うわさ］流しているらしいけど。」
B「あ、そうなの？」
S「絶対X女子大の方が遊ぶと思うけど。」

（1年女子のグループの話し合い例4）

この例では、自分の大学では友達づきあいが広く浅いが、他の大学はもう少し深くつきあっているようだと、自分の大学についてやや否定的な話が出たところで、他大学の人が、自分の大学について否定的な評価をしているという意見が出た。自分の集団に対して否定的な評価をする流れの中で、学生Sは「絶対X女子大の方が遊ぶと思うけど」と、自分の集団について防御的な態度で臨んでいる。このように入学して間もなくの頃は、自分が所属している集団がどういうものであるのか自分なりの主観的な意見を述べ合い、そのあとで他の集団との比較で否定的な評価を加えつつも、自分の大学を援護し、自分の集団の社会的な位置づけを試みている。

3. 3. 2. 自集団の他集団との比較による位置づけの変化と帰属意識

この自分の集団についての他集団との比較による評価は、学生の集団への帰属意識に影響を与えていた。自分の集団についての社会的評価は、自分がその集団に続けて所属していくか否かを決断する材料となる。

自分の集団について肯定的な感情を抱くとその集団に留まり帰属意識を強めるが、自分の集団について否定的な感情を抱きそれが強まると、他集団への移動を決意する。

入学した大学より、次第に他大学により魅力を感じ、編入を希望している大学生の場合は、自分の大学への帰属意識が次第に低くなっていく。ある大学3年生女子は、「入学してからこれまでで大学への帰属意識は弱くなっていると思う。それは私自身が魅力を感じて

いる大学があり、そこに所属（編入）したい気持ちがどんどん強くなっているから」と述べている。この事例は、自集団より他集団をより魅力的なものとして認識することで、自集団への帰属意識を低めている例である。

逆に、ある学生は、入学したときに、自分が社会的により認められている大学に憧れたり編入を希望したりしていたが、現在は帰属意識が高いという。「入学したときは、編入したくて仕方ない気持ち［が強かった］、この大学の一員だと思われたくない。現在は、編入しないと決め、専門を変えた2年生から帰属意識が高まる。ゼミが始まったので、その専攻の帰属意識が高い。先生と仲良くなることで、さらに帰属意識が高まった」（大学3年生女子）。「入学当初は、第一志望校ではないことから、他大学への憧れが強く、自分がT大学の一員であることを認めたくなかった。しかし、友人ができ大学にもなれ始めた頃には他大学との友人との会話の中で、T大学のことを「私の学校」と言い始めたので、帰属意識が強くなったのではと思う」（2年生女子）。入学当時は、自分が納得いく大学ではなかったため、大学の一員であることを認めたくなく、編入を考えていたが、ゼミでの活動を通して大学での学びに意義を見出し教員や友人との関係を深めることで帰属意識を深めた。

学年が進むと、集団外の人に、自分の大学を肯定的に説明する中で、帰属意識の強まりを自覚する事例があった。ある大学3年生の女子は、「高校時代の友達と大学1年の時、お互いの大学について話していたが、その時は悪い印象や自分のイメージと違ったことを話し合っていた。今となっては、『うちの大学は、こうじゃなくてこういう風にやっているよ』と肯定的な意見で話すようになった」と語った。また、別の3年生の女子も「入学当時は帰属意識が全くなく、個人で動き、自身が大学の一員であるという意識がなかった。2年くらいから友達もできているので会話の中で大学のことを話すようになり、大学の一員という感覚が出てくる。他の人に大学の話をしているときなどにも、一員だからこそ説明できることがあるので、自分の大学をよく伝えようと思う気持ちも帰属意識によるものだと思う」と述べている。これらの例から、高校時代や大学以外の人に、入学時に比べ、自分の大学をより肯定的に伝える気持ちが強まっている中で、帰属意識の強まりを確認していた。

また、大学のクラブ活動で他大学と試合をする中で、帰属意識を強く感じる事例がみられた。「最初は、感情も何もないまま過ごしていたが、部活に入っていると大学の名前を背負って戦っていると感じるときがある。それは1年のときより2、3年になるにつれて帰属意識を強く感じる」（大学3年男子）。「部活で他大学と試合するとき、T大学という看板を背負っているんだと実感する」（大学2年男子）。クラブ活動は大学という集団のいわばサブカルチャーであるが、クラブ活動の試合という競争的関係において、自分の集団に帰属意識を強く感じ、その意識は年数を経るに従って強められていた。

3.4. ジャーゴンと帰属意識

3.4.1. ジャーゴンの知識度の変化

大学には、大学独特のキャンパス用語がある。ジャーゴンの知識量は集団での時間経過とともにどう変化するのであろうか。

4月の新学期から1カ月たった5月に行った「ジャーゴンについての知識度のアンケート」の結果、ジャーゴンの20問中の正答平均数は、1年が15.8、2年が18.3、3年が18.6、4年が16.4であった。1年が最も低く、2年、3年と上がっていく。しかし、4年では下がっている。これは、この大学の制度が、3年と4年とで大きく変わり、カリキュラム変更に伴い、ジャーゴン自体が変わっていたからであると考えられる。翌年、同じくジャーゴンの知識度を評価したところ、12.2、19.4、18.3、20.1、となった。従って、ジャーゴン知識度は、1年と2年との間に差が最もあり、その後はカリキュラムの変更がない限り2年次の知識度がほぼ維持される。従って、1年次の6月以降から2年時になるまでの間に、ジャーゴンの知識はほぼ獲得されると考えられる。

このようなジャーゴンはどのように獲得されていくのであろうか。

3.4.2. ジャーゴンの獲得

大学1年生の話し合いは、入学して2か月後と6カ月後の6月と10月時点に行った。6月時点でのグループの話し合いで、ジャーゴンを友人に共有していく事例が観察された。

Y 「やる気ないとか言ってたよね。」
C 「学校で泣きそうになったかもしれない。」
Y 「キリスト教の授業でさ。」
C 「なんでキリ教って言わないの。皆いなくてさ。20人ぐらいしかいなくて。」
Y 「学校、見るからにね。誰もいない。」

(1年女子のグループでの話し合い例5)

グループでの話し合い例5では、新大学生が大学に慣れなくて大学の授業を休む人が多かったことを話す中、一人の学生が大学の科目の「キリスト教」と言うと、別の学生が「キリ教」というジャーゴンを使わないのか、とすかさず指摘していた。

C 「コミュニケーションいきたい」
A 「お金かからないの？」
C 「かからない、かからない」
A 「そうそう、1年の必修あるじゃない。コミュニケーションの必修1つでしょう。わたしたち、言語文化とライティングか。だからその2つぐらいをまた、2年ぐらいで取らなきゃいけないんじゃないの。

C 「え、4つじゃないの」
A 「4つ？」
C 「AとBとライティングとリーディングじゃないの？」
B 「それは、コミュニケもやってるじゃん。独自のやつ」
D 「あ、そういうこと」
C 「あ、ほんと、コミュニケーションいけばよかった。」
A 「『パラコミ』。」
C 「コミュニケーション面白そうじゃない。なんか。」
A 「メディア論とかだよね。」
D 「私、あれ取っているけど面白いよ。なかなか『げろげろ言語』だよって言われて。」
B 「なに『げろげろ』って？」
C 「誰言ってんの、その『げろげろ』は？」
D 「えっ昔から2年前から。」
C 「すごい、ちょっとお先真っ暗って感じでさ。」
D 「言語思ったよりつまんなかった。」

（1年女子のグループでの話し合い例6）

グループの話し合い事例6では、「言語」と「コミュニケーション」の異なる学科の学生同士が話している中、学科名の「パラコミ」というジャーゴンは共有されている一方、「げろげろ言語」がまだ共有されていないことが示されている。まだ共有されていないジャーゴンについては、そのジャーゴンを理解できない学生が、理解している学生に説明をしてもらうという場面である。

先に、ジャーゴンの知識度は、1年次から2年次になるまでの間に、ジャーゴンの知識はほぼ獲得されると考えられるということがわかったが、グループでの話し合い例5と6は6月時点であり、10月時でのグループの話し合いでは、ジャーゴンを共有していく事例はとくに観察されなかった。従って、6月時点でのジャーゴン獲得のペースは、10月時点より速いということが推測される。これは、4月入学時点で大学生活の人間関係や目標達成の不安が強い中、自分の所属する集団の知識を少しでも得たいという欲求が強いことを表していると考えられる。

このようなジャーゴンは、集団の帰属意識にどのような影響を与えるのだろうか。

3.4.2. ジャーゴンの役割と帰属意識

大学生の語りから、ジャーゴンを使うことには、3つの役割があることがわかった。まず1つは、その集団の構成員であることを非公式に保証する役割である[3]。大学3年生女子が、入学時を振り返って、「『T大学生になった』と強く感じ、慣れようとジャーゴンも覚えたものを使って『大学生っぽいな』と思っていた。現在はジャーゴンも普通に日常的なも

のになり、特に何も感じない」と語っている。また、大学2年生女子が、「後輩が自分が何気なく使ったジャーゴンが理解できなかったとき、自分の帰属意識の高さを感じる」と述べた。ジャーゴンを使えるということは、非公式ではあるが「本当の大学生」であるという認識を与えている。

もう一つの役割は、「友人と交流を可能にするツール」である。2年生の女子は、「ジャーゴンを通して考えてみると、最初は何もわからないし、知っている人もあまりいなかったからそこまで［帰属意識は］強くはなかったし、ただ通っているだけだったと思う。それに対して今は、ジャーゴンがかなり通じているし、たとえば校舎、教室などがわかり、いつも一緒にいる人も増え、部活を通して、今はとても［帰属意識を］強く感じる」と述べている。また、3年生の女子は、「入学してすぐのころは、・・・ジャーゴンを意識的に使おうという友人も多かったので、『仲間はずれ』にされないように必死に知ろうとしていた」と述べている。これらの語りには、ジャーゴンを使うことで、友人を作り「仲間はずれ」にはされないですむ、という認識が表れている。逆に、ジャーゴンを知らないということは友達がいないことでもあり、そのことは帰属意識の弱さを表すことになる。ある3年生の男子学生は、「入学してからも今もそれほど帰属意識はなく、授業が終わり、友達に遊びに行こうといわれてもすぐに帰る。大学のジャーゴンも知らない」と述べている。

3つ目の役割は、「大学の知識を効率的に活用するツール」である。大学の建物や制度についてジャーゴンを使いこなすということは、それを意味することを手身近な言葉で効率的に伝えることができるため、授業履修という目標達成を促すものである。「最初は全く知らない人ばかりでまったく授業にも環境にも慣れていなかった。ジャーゴンも知らなかったので不安な気持ちや慣れていくのに精一杯だった。ある程度の友達ができ日常会話で大学のジャーゴンを当たり前のように使い、建物を覚えたりすることで帰属意識がだいぶ強く変化していた」（大学3年生女子）。

このように、ジャーゴンの活用は、その集団の構成員としての非公式な正当性を与え、集団内の連帯感を高め、大学の知識活用を効率化することで、構成員の集団への帰属意識を高めているといえる。

4. まとめと考察

本研究は、集団への帰属意識がどのように作られるのか大学生の事例をもとに検討した。特に、集団に入ったばかりの構成員の帰属意識と年数を経た構成員の帰属意識の変化をみることで、大学生にとっての大学という集団への帰属意識はどのような要因に影響を受けるのか、集団で使われるジャーゴンにも注目しながら検討した。

集団の帰属意識は、①「集団における人間関係」[4]、②「集団での目標達成」、③「自集団の他集団との比較」により、自分の集団に肯定的な感情を抱くことで、帰属意識が高まることがわかった。また、④集団内のジャーゴンは①の人間関係や②の目標達成を促進させる機能を持ち、集団の正統な構成員であることを非公式に認める意味をもつ。本研究は、

集団の帰属意識を作るこれらの4つの要因は互いに関係をし合っていることを明らかにした。

しかし、社会的アイデンティティ理論は、集団に入ったばかりの構成員が経験を重ねると帰属意識はどう変化するか、また集団内における人間関係や集団内での目標達成が帰属意識にどう影響するか、また、言語的側面は帰属意識とどう影響するかについては十分関心を払ってこなかった。もともと社会的アイデンティティ理論が、内集団と外集団の関係から人々の行動を理解しようとしてきたためである。

本研究の事例でいくと、3つめの要因、「自集団の他集団との比較」は、社会的アイデンティティ理論がこれまで扱ってきた次元である。確かに大学生は、入学時期には他集団との比較をしながら、自分の所属する集団がどのような位置にあるのか知ろうとし、自分の集団について完全否定はせずどこか援護するような肯定的評価をしていた。さらに、集団に肯定的感情を抱くことができれば、その集団に続けて留まるが、肯定的感情が得られなくなった学生は、集団への所属をあきらめ、より望ましい大学（自分が肯定的感情を得られる集団）への移動を考えていた。これは社会的アイデンティティ理論の中の「個人的移動」の概念で説明できる。「個人的移動」は、個人が自分の集団を離れ、より優位な集団に移動することで、肯定的なアイデンティティを得ようと試みるものである。本研究の他大学への編入の事例は、より優位な集団への自主的な「個人的移動」の具体例といえる。

しかし、本研究の事例から、集団に入ったばかりの個人が「自集団と他集団」の比較をして自分の集団の位置を知ろうとする背景には、人間関係の希薄さからくる不安や、また集団での目標をどう達成していくか、そのための知識やスキルのなさからくる不安と無関係ではないことがわかった。自分が所属したばかりの集団を理解しようとする新メンバーは、集団内での対人関係の安定を求め、また、集団での目標を確実に達成していこうと、主体的に働きかけ、その営みを補いあうように、自集団を他集団との比較し、自集団を客観的に位置づけようとする。 対人関係の安定さ、課題達成の理解・スキル、自集団の他集団との比較は帰属意識に影響する重大な要因であるが、それぞれの要因は互いに影響しあっている。社会的アイデンティティ理論が従来説明してきた内集団と外集団の関係からの社会的アイデンティティ理論は、集団への帰属意識の部分的な説明に止まることを、本研究は示唆している。

また本研究から、集団特有のジャーゴンの知識度は、人間関係と目標達成の両方の要因に影響していることが示唆された。ジャーゴンは、「友人との交流を可能にするツール」「大学の知識を効率的に活用するツール」として人間関係や目標達成を促す機能を持っている。またジャーゴンを使えるということが、非公式ではあるが「正統な成員であることを保障する」機能もあることが見出された。ジャーゴンのこの3つめの機能については、Samovar & Porter（1991）が、主流文化に敵対するサブカルチャーにおいて統一された言語コード（たとえば、白人に対する黒人のエボニーなど）を使って自分たちの文化の統一感を保とうとする点を指摘しているが、大学のジャーゴンも類似した機能をもつものと解釈できる。さ

らに重要なことは、これらのジャーゴンは、集団内の成員同士の相互作用の中から獲得されていくということだ。このことは、学習は他者との相互作用の中で行われ、成員は他者との関係から集団の一員になっていくというLave & Wenger（1993）の「正統的周辺参加」にも通じるものである。社会的アイデンティティ理論では、集団間関係をもとに集団行動を理解することに関心をもち、これまで集団内の言語については注目してこなかったが、本研究で示された、成員が集団内の言語をどう学び、どう活用するかという視点から集団への帰属意識を探求する試みは、今後の集団研究において意義あるテーマであると考える。

注

1　このデータの一部は、日本社会心理学会第42回大会（2001年10月14日、愛知学院大学）において、「高校から大学への移行に伴う自己の再構築過程」にて発表した。今回の研究は、社会的アイデンティティという切り口からデータを分析しなおしている。

2　大学の制度や授業についての知識には、大学入学時に差がある。例えば、大学付属の高校から入学してきた場合には、大学入学時点では、相当の知識をすでに持っている。「私は付属の中学・高校に通学していて、高校生のころから大学の校舎に入ったり授業を受けたりしていたので入学する前とあまり変わらないです。でも帰属意識が学年が上がるにつれて強くなってきているのがわかります」(4年女子)。また、高校によっては、単位制を導入しているところもあり、高校から自分で履修計画を作ることに慣れている場合は、大学後の制度に対する不安は軽減すると考えられる。

3　公式に学生の身分を保障するものは、大学から発行される学生証である。

4　社会的アイデンティティ理論では、集団のメンバー同士の関係を表す概念として、集団成員間の魅力を「社会的魅力」、また親密な個人的関係に基づく魅力を「個人的魅力」を使って説明している。前者は、内集団の仲間として好まれること、後者は人間として好まれることを表す。本研究では、学生の語りからこれらを区別することはできなかったため、「人間関係」という言葉で表した。

参考文献

Argyle, M（1973）*Social Interaction*, London: Travistock.

Argyle, M（1975）*Bodily Communications*, London: Merhuen.

大坊郁夫（1998）しぐさのコミュニケーション―人は親しみをどう伝えあうか―サイエンス社

ホッグM.A. & アブラムD.（1995）『社会的アイデンティティ理論：新しい社会心理学体系化のための一般理論』（吉森護・野村泰代訳）北大路書房

Deters, F. P.（2009）*Identity, agency, and acquisition of professional language and culture: The case of internationally educated teachers and college professors in Ontario*, dissertation paper presented to University of Toronto（Canada）.

レイヴ　J. & ウェンガーE.（1993）『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』（佐伯胖訳）産業図書

Mehrabian, A.（1971）*Nonverbal communication*, in J.K. Cole（ed.）Nebraska Symposium on Motivation, vol. 19, Lincoln, Nebraska: University of Nebraska Press.

Miller, L.（2004）Those naughty teenage girls: Japanese kogals, slang, and media assessments, *Journal of*

Linguistic Anthropology, 14 (2), pp.225-247.
西村信勝（2008）「敵対的Ｍ＆Ａとジャーゴン－ 投資銀行の視点から」『文教学院大学外国語学部文教学院短期大学紀要, 7, pp.227-245。
山田政美・田中芳文　(1999)「ハリウッド・ジャーゴン―現代アメリカ英語スラングの研究―」『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第33号　pp.43-56.
Samovar, L.A. & Porter, R. E.（1991）*Communication between Cultures*, California: Wadsworth Publishing Company.
Tajfel, H.（1978）*Differentiation between social groups: studies in the social psychology of intergroup relations*, London: Published in cooperation with European Association of Experimental Social Psychology by Academic Press.
Tajfel, H.（1981）*Human Groups and Social Categories: Studies and Social Psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.
Tajfel, H. & Turner, J. C.（1986 ）The social identity theory of　ingroup behavior. In S. Worchel & W.G. Austin（Eds.）, *Psychology of Intergroup Relations*（2nd ed., pp. 7-24）. Chicago: Nelson.
垂澤由美子・広瀬幸雄（2006）集団成員の流動性が劣位集団におけるうち集団共同行為と成員のアイデンティティに及ぼす影響, 社会心理学研究、22 (1), pp.12-18.